

『蜻蛉日記』上巻49～52番の二組の贈答歌を中心とした場面の考察

— 道綱母にとつての和歌から實際面を採る —

堤 和 博

はじめに

『蜻蛉日記』上巻二年目九五五年の八月末に道綱が誕生した翌月、兼家が書いた町の小路の女宛ての手紙を道綱母が発見した辺りから事態は緊迫してくる。兼家と町の小路の女の結婚、兼家を門前払いして『百人一首』の歌詠歌などがあり、翌々年の夏に町の小路の女は出産する。出産時の兼家の振る舞いに道綱母は怒りを露わにし、かつ、生まれたのが男児と知って衝撃を受ける（以後、この場面を便宜上「出産の場面」と呼ぶ）。月が七月に変わって仕立物の依頼がきたのを突き返す（以後、この場面を便宜上「仕立物の場面」と呼ぶ）。仕立物の依頼主と用途には諸説あるが、道綱母は「見るに目眩る、こゝちぞする。」¹⁾とまで言うので、依頼主は兼家で産婦か新生児のための物であろう。結局「仕立物の場面」は「かしこにも、いと情なしとかやあらむ、二十余日、おとづれもなし。」とい

う結末で閉じられる。この両場面には道綱母の歌も誰の歌もない。ところが、「仕立物の場面」に続いては兼家から「参りこまほしけれど……」という手紙がきて、それを切っ掛けに一転して二人によつて46～57番歌が詠まれる。46～56番は贈答歌、57番は道綱母の単独歌である。この後、例の町の小路の女に対する憎悪の表白がある。町の小路の女が出産後兼家の寵を失い零落したことを言つて、併せて憎悪をむき出しにする記述である（以後、この記述を便宜上「憎悪表白」と呼ぶ）。ところが、兼家は自分の所に戻つてくるかと思いきや、期待に反して時姫の所に通い詰めで、そんなことに対するやるかたない気持ちから長歌を兼家に贈る（58番）に至る。兼家からも長歌の返歌があり（59番）、引き続き60～64番歌が遣り取りされる。そして上巻一五年間のうちの記事が欠けている期間に入る。本稿で取り上げるのは、「仕立物の場面」と「憎悪表白」に挟まれる46～57番歌のうちの、49、50番の贈答歌と51、52番の贈答歌が交

わされる二つの連続する場面である。

この両場面を取り上げるのは、『蜻蛉日記』上巻の記事が欠ける期間までを対象に、主として二つの観点から分析したことが大きい。その成果は、新典社新書41『和歌を力に生きる―道綱母と蜻蛉日記―』²⁾に纏めたのだが、その二つの観点とは次の二点である。

第一の観点は、道綱母にとって和歌がどのような意味を持っていたのかである。従来も当然重視されてきた観点ではあるが、自分なりに新しい切り口を示せたつもりである（具体的には後述）。第二の観点は叙述の問題である。これも従来論じられてきたところであるが、道綱母は自分が満足行くような面は叙述を避け、不幸・不満足な面が目立つような叙述を目指しているように思える。そして、第二の観点に第一の観点も絡めて考察し、叙述面を正確に解釈するにとどまらず、それよりむしろ、実際に道綱母が置かれた状況やその時の感情等を明らかにしようとした。

そうすると、「仕立物の場面」と「憎悪表白」に挟まれて、本稿で取り上げる両場面も含まれる46～57番の場面における道綱母の実際の心情は、通説の解釈とは裏腹なところや、裏腹とまではいかなくとも、かなり違ったところがあるのではないかと考えるに至った。さらに言うと、通説の解釈は叙述の解釈としては間違っていないけれども、それを実際の理解にまで及ぼすとすると間違いになる部分も多いのではないかと考えるのである。

そこで本稿では、46～57番歌の場面の中から前述の二つの場面を取り上げ、道綱母の心情を中心に道綱母と兼家の夫婦関係の実際面を探っていく。その際、通説における叙述面の解釈にも言及しながら進めるので、やや論が込み入るかもしれないが、ご了承を願う。

一 通説における解釈

本稿で取り上げる二つの場面は次のように描写されている（以後、便宜上、前の49 50番歌贈答の場面を「花の場面」、後の51 52番歌贈答の場面を「月の場面」と呼ぶ）。

前栽の花、色々に咲き乱れたるを、見やりて、臥しながら、かくぞいはる。^①かたみに恨むるさまのことどもあるべし。

も、くさに乱れて見ゆる花の色はたゞ白露のおくにやあるらむ（49・兼家）

と、うちいひたれば、かくいふ。

みのあきを思ひ乱る、花の上のつゆの心はいへばさらなり（50・道綱母）

などいひて、例のつれなうなりぬ。^②（以上、「花の場面」^③）

寝待の月の、山のは出づるほどに、出でむとするけしきあり。さらでもありぬべき夜かなと思ふけしきや見えけむ、「とまりぬべきことあらば」などいへど、さしもおぼえねば、

いかゞせむ山の端にだにとゞまらで心も空に出でむ月をば
(51・道綱母)

返し、

ひさかたの空に心の出づといへばかげはそこにもとまるべ

きかな (52・兼家)

とて、とゞまりにけり。(以上、「月の場面」)

最初に、この両場面に対する通説的な理解、特に道綱母の感情を中心とする二人の仲に対する理解を押しえておきたいが、両場面における焦点を絞るより、46～57番歌の場面全体における通説の見方を概略的に押さえておいた方が分かり易いであろう。通説は、贈答歌が交わされる事情や贈答歌によってもたらされた結果は様々であるけれども、「出産の場面」から「仕立物の場面」にかけて頂点に達した感のある怒りなどの激情を、46～57番歌の場面でも道綱母はまだかなり引きずっているとしてこの場面全体を理解しているのではない。よって、二人の仲については、十分には修復していないとみているのではない。町の小路の女に対して言えば、直後の「憎悪表白」で表白される感情をこの時も抱いていたとみているのではない。そしてそのまま兼家が今度は時姫の許に行ってしまった不満吐露に繋がるとみるのではなからうか。この通説の解釈を實際面に及ぼしてよいのか、「花の場面」から順次考えていくことにする。

二 49番歌贈答の場面（「花の場面」）

「花の場面」では特に贈答歌の前後の傍線①②が問題である。通説は、ここを要は文字通りに理解し、喧嘩をしていた二人が贈答歌を交わしたが、それは言わば口喧嘩を歌で行ったものであり、またいつものように、兼家は、あるいは二人とも、冷淡になったと解するのである。勿論、先にも触れた通り、町の小路の女の件に関する激情を引きずっている面をも重視しての理解であろう。

ところが、この場面については、特に傍線②の意味に着目して森田兼吉氏⁶⁾が既に見直しを行っている。森田論は三つの主要な点から構成されるが、後の論考とも拘わってくるので、ここでその三点に私論も加味しながら森田論を辿っていくことにする。

森田論の一点目は、「憎悪表白」の冒頭が、
かうやうなるほどに、かのめでたき所には、子産みてしより、
すさまじげになりたべかめれば、人憎かりし心、思ひしやう
は……

と始まっていることなどからして、「花の場面」の頃には「兼家の町小路の女への熱愛はさめていたのであろう」とする点である。

実は簡単な話だと思うが、従来あまり重視されていないようなので、念のために私にも説明を加えておく。つまり、傍点部の記述と、「はじめに」で触れた通り、「出産の場面」から「仕立物の場

面」にかけては月替わりがあり、かつ「仕立物の場面」は「……二十余日、おとづれもなし。」で閉じられるので、それを受ける46、48番の場面まで時間経過があることを併せ考えると、「花の場面」と「月の場面」も含まれる46、57番歌の応酬がある頃と、兼家が町の小路の女に興味を失いつつあつて町の小路の女が零落していくのとは同時進行であつたのが分かるのである。あるいはその頃には兼家は既に町の小路の女への興味を失つていたかもしれない。また、傍点部のように書くからには、道綱母も兼家が町の小路の女に興味を失いつつあるのに勘づいていた筈である。

この町の小路の女の件に関する点は当然重視しなくてはならず、さらに私は、この点には増田繁夫氏の主張も加味するべきだと考える。例えば「憎悪表白」に対して次のように解説する考えである。^⑧

こんなに町の小路の女を憎む理由の第一は、やはり兼家の妻たちの順位争いによるものであろう。(中略)後から現われた町の小路の女には、追われる立場にいることもあつて、憎悪をむき出しに見せたのであろう。

この考えに従えば、46、57番歌が遣り取り取りされる頃の道綱母は、自分の妻としての地位に町の小路の女が与える影響を心配する必要はなさそうだと分かり、町の小路の女に対する憎悪も、兼家に対する怒りなども落ち着いてきていたと思われる。

そもそも道綱母は結婚前から兼家に新たな妻が出現するのを予測

していた筈、子供の頃からそんな教育を受けていた筈である。それでも実際に町の小路の女が現れ、ましてや彼女が男児を出産するに至っては、感情を制御できなくなつてしまつたのだと思ふが、事柄がここに至ると、気持ちが悪く落ち着く方向に向かうのが自然ではないか。兼家もそんな道綱母の様子に勘づいて46番歌の前の手紙を送つたのであろう。^⑨

ちなみに、上巻の記事が欠ける期間が終わつて九六二年に入る前に、「めざましと思ひし所は、今は天下のわざをしさわぐと聞けば、心やすし。」と言っているので、兼家に見捨てられた町の小路の女がじたばたしていると聞いた時点で「心やすし」と完全に落ち着いたことになる。それが何時かは明確でないが、恐らくは、「めざましと思ひし……」の直前、即ち、長歌とそれに続く五首の遣り取り(58、64番歌)の直後で、兼家が「すこし心をとめたるやうにて、月ごろになりゆく。」という頃と重なるのであろう。^⑩

森田論の二点目は、46、57番歌を見渡して、「このあたり、二人の仲を取り結ぶものとして、和歌が有効な働きをしていることが目につく。」点である。当該両場面における50番・51番歌もそうだし、特に本降り雨の中を出掛けようとする兼家を引き留めるのに失敗した形の57番歌など、一見和歌が「二人の仲を取り結ぶ」働きをしていないようにもみえるが、私も結論的に森田氏と同様に考えるのである。^⑩ただそれは、森田氏よりもっと範囲を拡げて、道綱母に

とつての和歌がどのようなものであったのかを考察しての上である。その私の考察は、新典社新書41と四本の旧稿で示してある。¹¹これらの旧稿も、先に示した新典社新書41における二つの観点と同様の観点を主調としながら、あるいは、含みながら纏めたものである。ここで、新典社新書41と旧稿で展開し、本稿での検討の基盤ともなる道綱母にとつての和歌に関する私の主張を簡潔に纏めておく。

I 道綱母は、理想としては兼家からの贈歌で始まる贈答歌の成立を求めていた。それが二人の愛情の確認に繋がると思っていた。また、愛情確認には、返歌で贈歌の内容に鋭く切り返すことも必要だと思っていた。

II 結婚成立後は兼家からの贈歌はめっきり少なくなり、自ら歌を贈ることが多くなった。これは、鈴木一雄氏¹²が分析した「女からの贈歌」がなされる場合に当て嵌まる場合が多い。即ち、「男との仲の危機あるいは悪化」が見られる時に、「女のあせり、歎き、訴え、渴きなどの強調」が歌でなされる場合である。

III 町の小路の女の出現後、道綱母は感情が昂ぶると兼家に対しては古今調の正統な歌を詠めなくなり、たとえ詠んでも贈る気になれなかった。その代わりにと言ってよからう、時には時姫に歌を贈ったり、歌語り享受などに向かったりした。

さらにIIに関連する事柄として「花の場面」の直前の場面にある46番歌を見ると、これは道綱母の方から最初に兼家に贈られた歌で

はあるが、先程確認した森田論の一点目とも拘わって、それはもう「女からの贈歌」にはなっていないと旧稿^(iv)で分析した。¹³即ち、町の小路の女を意識して「あせり」や「嘆き」などを和歌で訴える必要はこの時点ではなくなっていたのである。

そうすると、46〜48番歌の場面に続く「花の場面」においても、道綱母の感情は同様にと穏やかであったとみるべきであろう。それやはり和歌の観点から押さえておくと、49番の兼家からの贈歌^(iv)で贈答歌が成り立っている点がIとの関連からして何より肝要である。50番の道綱母の返歌の内容も、切り返しの内容を目指したと捉えるべきであろう。つまり、例えば「蜻蛉日記注解十一」⁽¹⁵⁾の次の見解のように、歌の内容に重きを置いて道綱母の実際の心情を理解するべきではないと考えるのである。

いうまでもなく「思ひ乱る、花」「つゆ」は兼家の贈歌に応じて、それぞれ「作者の外目に現われる屈託の様子」および「その苦悩に満ちた心情」を指し、「秋」に「厭き」を懸けている。また「いへばさらなり」は、原田氏の注意されたとおり、「いつてしまえば世の常になる、それには尽せぬ気持である」の意（上掲論文）。

森田論の三点目が残っているが、以上の二点から「花の場面」における道綱母の心情を考えておくと、通説で捉えられているより余程穏やかな状態であったとみなくてはならない。兼家の心情も当然

同様であつただろう。

では、贈答歌の前後の傍線①②はどう捉えればよいのか。森田氏は、以上の二点を踏まえて三点目で傍線②について考察している。氏は、「つれなし」の基本的な意味を押さえた上で、『蜻蛉日記』中の「つれなし」「つれもなし」の用例を吟味して、次のように結論し、同時に通説に批判を加えるのである。

「かたみに恨むるさまのことどももあるべし」という二人が、和歌の贈答によって表面的には仲直りをしたと読めるのである。「つれなし」は、おたがいに完全に相手を納得し受け入れたわけではなく、心中のややもやしたものはなお存したのであろうけれども、それを押さえ、平静を装いえたというのである。「例」から訳してみれば、「いつものように、表面的にはおだやかな仲となつた」とでもなろうか。「例の」とあるから、こうした妥協ないしは仲直りが、このころはよくあつたというのであろう。ここに語法的にも前後関係からも無理な「よそよそしい」「冷やかだ」の訳語が充てられ、定説化しているのは、人にもあらぬはかない身の上を描いた作品という読みの論理に左右されすぎているのではなからうか。(二重線等は引用者)

森田氏の用例吟味を検証するに、二重線部は十分に首肯される。点線部も恐らくその通りで、新典社新書41の第二の観点とも繋がる。問題は線を引かなかつた所である。この解釈は、「つれなく

りぬ」の語法的意味のみならず、傍線①における二人の喧嘩を、それ相応の喧嘩であつたと見なすことが前提となつての解釈のようである。傍線①を文字通りに解せばその通りになると思ふのだが、この喧嘩ははたして実際にそのようなものであつたのであろうか。

私は、細かい叙述にまで目を遣ると、傍線①の喧嘩は喧嘩だとしてもたいしたものではなく、ちよつとした痴話喧嘩ぐらいのもではなかつたかと思う。それは、道綱母も喧嘩していたことを執筆時点では忘れてしまつていて、歌の内容から「……あるべし」と類推しているからである。よつて、喧嘩の原因も、町の小路の女のことをあるいはまだ幾分かは引きずつていたのかもしれないが、別件であらう。町の小路の女の件が原因なら類推にはならないと思うからである。さらに、「かたみに……」と言っているのも注意される。町の小路の女の件に関してであらうとなかろうと、道綱母が本気で怒っていたのなら、自分の怒りのみを強調し、兼家側にも「恨むるさまのこと」があつたとは認めないと思うのである。

以上のことを総合して「花の場面」の實際面を捉え直しておく。「仕立物の場面」で最悪になつた感のある二人の仲は、兼家が町の小路の女に対する興味を失つていくにつれ修復の可能性が萌し、46頁48番歌の贈答で實際修復に向かう。それを受けた当該「花の場面」においても、傍線①の喧嘩などはないものではなく、兼家からの贈答による贈答歌が成立して重大なものとはならなかつた。特に

道綱母にとっての贈答歌の意味を考えると、贈答歌の内容よりも、兼家からの贈歌で贈答歌が成り立ったこと自体が重要なのである。

実際面を踏まえて叙述面も考えておく。傍線②は、森田氏の解釈によるにしても、そんな二人の仲をやや大袈裟に深刻さが感じられるように描いていることになろう。あるいは、仲直りしている中の小さな採め事を、仲直りしている点を消して叙述していると言えよかろうか。いずれにせよ、この叙述は同時に傍線①の喧嘩をそれ相応な喧嘩だととらせたいところからきているようでもあるのだが、それは実はたいしたものではなかったのが叙述面においても露呈していると私は思うのである。

三 5152 番歌贈答の場面〔月の場面〕

続く「月の場面」では、兼家が月の出る頃になって出掛ける素振りを見せるところで、道綱母がすかさず「さらでもありぬべき」という様子を見せるのが目に付く。これは、町の小路の女の件がほとんど片付いていることの表れともたれよう。そうでなければ、そんな様子は示さずに、兼家が出て行くのを無視したであろうと思うのである。そしてまた怒りの言葉を書き付けたと思うのである。続いて、兼家の「とまりぬべきことあらば」という言葉に應えて歌を詠んでいるのは、気持ちか穏やかであったからだと思われる。この歌は、兼家の言葉に素直に應えて引き留めようとする歌でないのは確

かである。しかし、その内容を重視して道綱母の実際の心情を考えるのはあたらぬ。これは、贈答歌の返歌のごとく丁々発止の遣り取りを試みたからこのような内容になったと捉えるべきである。つまり、兼家の「とまりぬべきことあらば」という発言を言わば贈歌と取りなし¹⁶、それをすかさず形で「私にはどうしようもありません」という歌を、言わば返歌として詠んだのである。兼家に留まって欲しいからといって、素直に兼家を引き留める歌を詠めば、負けになるのである。要するに、先に示したIと近い心境にあると考えるのだが、Iは主として町の小路の女の出現前、即ち、妻としての地位の危機を感じていない時に見られた状況なのであった。

このように道綱母の意識を理解した上で、次に兼家の意識についても考察しておきたい。これまでの経緯からして兼家の方でも当然道綱母の気持ちか穏やかになっていと感じていた筈である。だから、安心して出掛ける素振りを見せられたのだが、結局留まっていなくても考えると、この素振りと言わば演技ではないか。本当に出掛ける気なら、また、出掛けなければならぬのなら、この後の57番歌の場面のように「それはしも、やんごとなきことあり」とて、出でむとするに」というような態度に出ることになろう。ここでは、出掛ける必要もつもりもなく、演技しているのだと考えられる。それも、恐らく他の女とこの月を眺めるのだと匂わして道綱母の気を引こうとしているのであろう。あるいは、もう興味を失って

はいるものの、町の小路の女を意識させたいのかもしれない。いずれにせよこの演技の趣旨は、勿論道綱母の気の利いた歌を期待するところにある。道綱母なら自分の期待に添えてくれるだろうと当然見越しての上である。道綱母が「さらでもありぬべき」というふうな様子を見せたところで、すかさず「とまりぬべきことあらば」と具体的に自分を引き留めることを促すのも宜なるかなである。

そこで、今も取り上げた「とまりぬべきことあらば」という兼家の発言についても少し考えておきたい。勿論実質的には歌を要求しているのであるが、兼家の表面的に言い表したいところを想定するとすれば、『全注釈』¹⁷の解「つまり、いい歌を詠め、または愛情を示せ、そうすればそれに感じてとどまろう、の意。」(傍線等は引用者)の傍線部のごときに見なすならばそれは行き過ぎで、波線部でもやや無理であろう。これは例えば『新大系』¹⁸が「留まらねばならぬ用があるのなら」と訳しているのが兼家の言い表したいところとしては妥当であろう。このように男女間の歌語りの状況のもと歌徳的結末にもつていく中で、男の方から露骨に歌を要求するのはやや興ざめだと思ふからである。¹⁹歌徳的になるには、用事の提示を要求されているにも拘わらず女が自発的に歌で応えている状況の方が相応しいであろうし、歌語りとしてもそちらの方が趣深いものとなるであろう。そんな場面が現出するのを兼家は目論んでいたと思うのである。

ところで、先に確認した道綱母の詠歌時の意識からすると、道綱母は歌語りの場面よりも、Iにおけるような贈答歌の応酬を望んでいたであろうから、兼家の意識とは一致してはいない。しかし、二人の仲にはこの時点ではほとんど蟬りが消えていたからこそ、二人の意識の違いに拘わらず、歌語りのな「月の場面」は成り立ったのである。「月の場面」に関しては、ここから二人の仲の深刻な状況を読み取る論は見あたらないと思うが、従来考えられていた以上に、二人の紐帯は強く回復していたと見なすべきだと強調したい。

ちなみに、「月の場面」に続いては、野分の二日程後の歌合戦(53〜56番歌)がある。この場面では二人が歌で心を通わし合っているのは明白だ。しかも、引用は避けるが、発端では、野分の日に見舞いを寄越さず二日後に訪れても見舞いの言葉をかけない兼家であるにも拘わらず、その後は、歌で遊んでいる様子がかがえるのである。また、旧稿^(iv)で考察したのだが、「仕立物の場面」の直後の兼家からの手紙がくるより以前辺りから道綱母の気持ちは治まりつつあり(注(13)参照)、46〜48番歌を遣り取りして二人の関係が修復に大きく向かったと思われる。

46〜48番歌の場面と野分の二日程後の場面に挟まれた「花の場面」と「月の場面」でもその前後の場面と同様なのであり、もつと言えば、両場面ともに、従来より以上に、二人の心境は穏やかであったと見なすべきだと主張したいのである。²⁰

四 「花の場面」と「月の場面」の非連続性

「花の場面」と「月の場面」を個別に考察してきたが、実は、両場面が同日の出来事であるかどうかが微妙で、この問題についても検討しておかなければならない。

まず諸注釈書を見るに、『全注釈』が、「前栽の花の節と寝待の月の節とは、同日のことか否か。本日記の書きぶりでは同日の記事のように見えるが、はっきりしない。」と言い、明確な根拠は示せていないものの、同日とみる方に傾いている。

確かに、この前後の一連の記事の繋ぎの部分を見ると、この直後の53～56番の贈答歌を描く場面は「さて、又、のわきの……」で始まり、さらにその次の57番歌の場面は「また、十月ばかりに……」で始まっており、それぞれ前の記事とは別日であることが明らかだ。また、「花の場面」の冒頭は「前栽の花……」となっているだけだが、前の46～48番の記事の末尾が「……又見えたり。」なので、ここにも切れ目があるのは確かである。「出産の場面」と「仕立物の場面」、「仕立物の場面」と46～48番歌の場面の間に、それぞれ時間経過があるのは、「はじめに」と第二節で確認した通りである。

このような時間経過を明示する書き方を見ると、「例のつれなうなりぬ。寝待の月の……」と続く「花の場面」から「月の場面」に

かけての所には切れ目はなく、同日の出来事であるように思える。『全注釈』以外の多くの注釈書も、検討する材料に乏しいせいか明言はしていないが、本文の段落の立て方からすると、同日の出来事と見なしているようだ（「寝待の月の」の所で段落分けをしていない）。別日と明言する注釈書は管見には入らなかった。

というところで、結局明確な結論は出せないものであり、『全注釈』のように言っておくのが穏当であろう。

しかしそれにしても、「花の場面」の冒頭近くに「臥しながら」とあるのには注意しておきたい。この「ながら」をどう解すべきかも微妙だが、「……したままで」と訳するのが最も自然だと思う。すると、「朝目覚めたが寝床から起き上がらないままで次の歌の遣り取りをした」と解せよう。歌に露が詠み込まれているのも、露が消えないで残っている時間帯であることを意識しているのかもしれない。すると、先程たいしたものではないと類推した喧嘩の原因は、昨晚からの言い合いか何かということになる。

ならば、「花の場面」と「月の場面」とは、同日としても時間の隔たりがあることになる。さらに言えば、同日としても、一旦兼家は帰宅するか参内するかして、夕方にあらためて来た可能性が高からう。すると、「花の場面」と「月の場面」が同日・別日いずれであっても、両場面は直接連続していないのであり、そこを「さて」や「また」あるいは「同じ日の……」などという繋ぎの言葉を使ま

ずに連続して描写している点に注目すべきだと思う（両場面が同日か別日か明確でない以上、この点に注目するしかないであろう）。

ここに注目すると、叙述面での問題が浮上してくると思うのである。というのは、先に「花の場面」の傍線①は、実際面とは裏腹に二人が本気で喧嘩しているようにとれることを問題にしたが、それと「月の場面」が連続していると、「月の場面」で兼家が帰ろうとしたのも、道綱母がそれに対して拗ねたような内容の歌を詠んだのも、「花の場面」での深刻な事態を引きずっているように読めてしまふと考えるからである。

五 実際面と叙述面との違いの問題

以上の考察で、「花の場面」「月の場面」における実際面と叙述面との違いもかなり浮き彫りになったと思う。それは、新典社新書41における第二の観点からくるのであるが、その新典社新書41でも指摘し、本稿でもこの辺りを読み直すのに重要であると指摘した「憎悪表白」の冒頭が「かうやうなるほどに、かのめでたき所には、子座みてしより、すさまじげになりたべかめれば、……」となつてゐる点にあらためて注目しておきたい。町の小路の女が兼家の関心を失うという自分にとって有利なことの経緯は今までの記事の時系列の中では書かないで、ここで初めて、かつ、纏めて言及しているのも問題だと思ふからである。この書き方は、町の小路の女の存在

に気づいてから辛酸を嘗めさせられた経過はその都度具体的に記述していたのとは、正しく好対照である。換言すれば、46～57番歌の遣り取りを記す際に、「兼家は町の小路の女に興味を失いつつあり、私達の仲は修復に向かつていた頃、こんな歌を遣り取りした」などと書けばよさそうなのに、傍点部のようなことは書かないのである。加えて、町の小路の女の零落を言うのは「すさまじげ」一言で済ませ、急ぎ「人憎かりし心……」と憎悪の感情を書き連ねていく点にも注意される。引用は避けるが、町の小路の女に対する憎悪はつらつらと書き連ね、貶めるためには出自にまで具体的に触れる一方で、事態が自分にとって好転する面は抽象的な一言しか書かないのである。これは、記事の空白期間が終わった後「めざましと思ひし所は、今は天下のわざをしさわぐと聞けば、心やすし。」と書いてゐるのも同様であろう。「心やすし」となったことは、やはり記事の時系列中からは外され、一言で済ましてゐるのが見て取れる。

このような叙述も、当該面場面とその前後の場面が実際より深刻な状況であるかのような印象を与えるのに与つてゐると思う。

以上、『蜻蛉日記』に道綱母の実際の人生がそのまま叙述されてゐるとは限らず、そんな場合の叙述解釈は、作品の解釈としては誤りではなくとも、それを道綱母の実人生の理解にまで及ぼすと誤りとなつてしまふであろうという問題意識で「花の場面」と「月の場面」を考察した。その結果、両場面における実際面の把握は通説と

は違ったものとなった。また、従来指摘されてきた不幸感が前面に出るような書き方も、従来より以上に意図的なものであったと捉えなければならぬであろう。そうすると、実際の理解にまで及ぼすとなると間違いになるとここまで批判的に引用してきた通説や従来の説は、逆に言うところ道綱母の意図した叙述の解釈としては正しい場合もあることも、繰り返し注意しておかなければならない。

注

- (1) 『蜻蛉日記』の引用及び歌番号は、柿本斐氏著・角川文庫『蜻蛉日記』（一九六七年一月）による。傍線等は、私に施した。
- (2) 二〇〇九年一〇月。以後、「新典社新書41」というのは、この拙著を指す。
- (3) 「なりぬ」の部分は、宮内庁書陵部蔵桂臣本（〔種本〕『蜻蛉日記（上）』宮内庁書陵部蔵）笠間影印叢刊68・一九九二年三月再版第一刷による）では「世ふ」となっていて意味が通じない。「よふけて」「よふけぬ」「ふせり」などと校訂する説が出されたこともあったが、「世」を「也」の、「ふ」の「草体」を「ぬ（奴の草体）」の誤写とみる『かげろふの日記解纂』以来の説が通説となっており、それに従うべきだと考える。
- (4) 51番歌は『後拾遺和歌集』巻十五・雑一・869番（番号は『新編国歌大観』による）に採られている。そこで、『後拾遺和歌集』の注釈書を見ると、藤本一恵氏著『後拾遺和歌集新釈下巻』（一九九三年七月・風間書房）が【参考】の欄で「月の場面」を引いて、次のように言う。

この時分、兼家は町小路の女に通い、夜離れがつづく。女が男子を生んだと聞いて、夫婦仲がとみに冷え切ったころのことである。この前後の文章には、「死ぬるものもがな」「心う」「胸ふたがる」「見るに目く

る心地ぞする」「心づきなきや」と憤懣やる方ない心情を表出して、結婚後最初の難関にさしかかったことを示している。

引用されている『蜻蛉日記』の語句のうち、最初の三つは「出産の場面」に次の「見るに……」は「仕立物の場面」にある。「心づきなきや」に一致するものはこの前後にはないのだが、「心づきなし」という形容詞が「憎悪表白」中とその後長歌（58番）の直前にあるので、これらを指すのであろう。いずれにせよ、藤本氏の解説は『蜻蛉日記』解釈の通説を受けていると言えるのではない。

(5) 「つれなうなり」の主語は、兼家ととる説と、二人ともとる説に分かれている。

(6) 「返し、いと古めきたり」例の「つれなうなりぬ」『日記文学の成立と展開』（一九九六年一月・笠間書院）第一部「古代の日記文学」第三章『かげろふの日記』を読む。森田氏の論には後にも言及・引用するが、すべて同論文により、その際は注を付けない。

(7) 新編『日本古典文学大系』土佐日記『蜻蛉日記』は木村正中、伊牟田經久氏担当、一九九五年一〇月・小学館）も、46、57番歌について、「これらの贈答の模様を通して感じ取れるのは、一概には言えないけれども、兼家の作者に対する気持がいくぶん好転してきていることである。それは彼の町小路の女への関心がだいに薄らぎつつある様子をおのずから語るものではないか」（傍線は引用者、注〔20〕で言及する）と云う。

(8) 日本の文学古典編8『蜻蛉日記』（一九八六年九月・ほるぷ出版）より。

(9) 46番歌を端緒とする三首の贈答歌の場面の発端は次の通り。

いかなる折にかあらむ、文ぞある。「参りこまほしけれど、つつましくてなむ。たしかに『来』とあらば、おづくも」とあり。返りこともすまじと思ふも、これかれ、「いと情なし。あまりなり」などものすれば、ほに出ててはじやさらにおほよそのなびく尾花にまかせても見む

(46・道綱母)

なお、この辺りで論じたことは、『蜻蛉日記』上巻46、48番の贈答歌を中心とした記事の考察―道綱母にとつての和歌、兼家との贈答歌―(言語文化研究徳島大学総合科学部) 17・二〇〇九年二月)でも論じた。

(10) 57番歌については、和歌の無力感を重大視する読みが多いが、その必要はないと考えている。詳細は、53、56番の場面も含め、別稿で論じたい。

(11) 四本の旧稿とは次の通り。

(i) 『蜻蛉日記』上巻の最初の引歌表現―いかにして網代の氷魚にこと問はむ―(伊井春樹編『古代中世文学研究論集第一集』一九九六年一〇月・和泉書院。『歌語り・歌物語隆盛の頃―伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学―』(二〇〇七年一〇月・和泉書院 第二部第一章に所収)。

(ii) 『兼家の嘘の言い訳を求める道綱母の歌語り享受―道綱母対町の小路の女と恵子女王対好古女―』(言語文化研究徳島大学総合科学部) 14・二〇〇六年二月。

(iii) 『蜻蛉日記』上巻の「返し、いと古めきたり」考―道綱母と兼家の贈答歌の問題を中心に―(言語文化研究徳島大学総合科学部) 16・二〇〇八年二月。

(iv) 注(9)論文。

(12) 『王朝女流日記論考』(一九九三年一〇月・至文堂)第五章「日記文学における和歌(その2)―女からの贈歌―」並びに、「第八章『蜻蛉日記』の一解釈―なほもあらじ―考」参照。引用は、第八章から。

(13) 兼家からの手紙に返事を出す気はなかったのを侍女に窘められて歌を贈っていることなるこの場面(注(9)の引用参照)を、従来は表面的に解して、道綱母の機嫌は損なわれたままであるとの見方が強いが、私の考えは違う。兼家が町の小路の女に対する興味を失いつつある中道綱母の機嫌は直りかけであり、実は兼家に歌を贈りたいのだが侍女の手前素直になれずにいるのを

汲み取った侍女が、窘める体でもって返事を促しているのと見なしているのである。この件は「若き御心(心地)に」考―『蜻蛉日記』上巻の侍女の言葉―(『解釈』二〇〇九年三、四月号・55巻3、4号・二〇〇九年四月)で論じた。

(14) 反対に兼家から贈歌がないと道綱母は機嫌を損ねるくらいのあることを旧稿(iii)(iv)で指摘した。特に15・16・18・23番歌に顕著である。さらに、「花の場面」の直前の46、48番の場面で、注(13)で述べたような態度を取つたのは、あるいは、兼家からの手紙に歌が添えられていなかった不満も関係しているのかもかもしれない。

(15) 秋山虔、上村悦子、木村正中氏『国文学解釈と鑑賞』28巻4号(一九六三年三月・至文堂。引用されている原田氏の「上掲論文」は、原田芳起氏「蜻蛉日記私註(二)」(『平安文学研究』18・一九五六年六月)を指す。なお、「いつてしまえば」の傍点部は、原文では「へ」である。

(16) 注(14)で触れた点を考慮すると、兼家からの贈歌がなかった点に道綱母は不満足感を覚えた筈である。しかし、ここまでくるとそれはほとんど問題にならないようである。それ程に道綱母の感情は、あるいは、二人の仲は修復している。そのような様子は、この後に展開される野分の二日程後の歌合戦(53、56番)からもうかがえる。

(17) 柿本獎氏著『蜻蛉日記全注釈上巻』(一九六六年八月・角川書店)を指す。以下、同じ。

(18) 新日本古典文学大系「土佐日記蜻蛉日記紫式部日記更級日記」(『蜻蛉日記』は今西祐一郎氏担当、一九八九年一月・岩波書店)を指す。

(19) 51番歌を載せる『後拾遺和歌集』注(4)参照)の詞書「入道撰政ものがたりなどしてねまちの月のいつるほどにとまりぬべきことなどいひたればとまらむといひはべりければよみはべりける」(引用は『新編国歌大観』による)では、特に私に引いた傍線部から、兼家は歌を要求したことになろう。

(20) この後の57番歌の場面に關しては注(10)参照。46、57番歌の場面の全体を通して言いたいのは、注(7)で引用した^{新編}日本古典文学全集の傍線部の見解に近い。ただ傍線部を看取する道筋は、私の考え方とは大きく異なっているようだ。ちなみに、57番歌の後にはさらに長歌の贈答(58、59番)とそれに引き続く歌の遣り取り(60、64番)がある。これも、道綱母は、兼家の長歌の出来映え・内容面などからして満足できなかったと見る見方も根強い。続く歌の遣り取り(60、64番)についても然りである。しかし、ここでも道綱母は、兼家からとかく長歌の返歌があったことに満足し、穏やかな気持ちで60、64番歌も遣り取りされたと私は考える。つまり、宮崎莊平氏が「蜻蛉日記上巻の長歌をめぐる」(『論叢王朝文学』一九七八年一月・笠間書院)で展開した、兼家の長歌のあとに「とか」と記されている点に注目した論考(新典社新書41の第二の観点と繋がる)の結論に従うべきだと考えるのだが、これも詳細は別稿に譲る。

(21) 同様の「ながら」の例は『蜻蛉日記』の中にも幾つかあるが、最も似通っているのは、中巻冒頭九六九年元旦の記事の中にある「……といふを聞きて、はらからとおほしき人、まだ臥しながら、物きこゆ。」であろう。

(22) 具体的内容を欠いて町の小路の女に触れている所として、九五六年の桃の節供の翌日の姉夫婦との交流と別居する姉との別れを描く場面の中の「かくて、今はこの町の小路に、わざと色に出でにたり。……」がある。町の小路の女に關して具体的に記す程のエピソードはなかったか思い出せなかったかはいずれかなのだが、町の小路の女より姉(夫妻)に焦点の中る前後のエピソードの中でも、町の小路の女のために嘗めさせられている辛酸を強く示唆したくて、具体性を欠きながらわざわざ間に挟んだのではないか。そうすると、これも町の小路の女によってもたらされる不幸は目立つように記そうとする姿勢からくるものと言えよう。

(23) ^{新編}日本古典文学全集(注(7)参照)が「月の場面」で、「兼家ははじめから

それほど強く出て行くつもりではなかったであろうが、作者の「いかがせむ……」の歌が兼家を無理に引きとめようとならないので、逆に彼女の気持がいたわしく感じられてとまったかのように書きなされている。」(傍線等は引用者)と解説しているのは示唆に富む。特に傍線部や波線部からすると、実際は傍線部のごときであり、従って、道綱母の歌によって兼家は出掛けるのをやめたのではないのだが、あたかもそうであるかのように叙述してあるというのではないか。

(補注) 「めざまし……」の指す時期については、拙稿『蜻蛉日記』上巻欠文部の養女問題攷―養女問題執筆削除の可能性(『古代中世文学論考第十一集』二〇〇三年一月・新典社)、『蜻蛉日記』上巻欠文部の養女問題・統攷―養女問題執筆削除説における上巻前半部の主題を中心に(『古代中世文学論考第十六集』二〇〇五年一月・新典社)で検討した。ともに(i)の拙著第一部第三章に所収。

―つつみ・かずひろ、徳島大学大学院ソシアール・サイエンス研究部准教授―